Osaka Shoin Women's University Repository

『枕冊子』における「ゆかし」の考察

北村英子

「ゆかし」という語の意味は従来の古語辞書によると、およそ「見たい」「聞きたい」「知りたい」などと解かれており、その方向に心が引かれる状態を示す場合に用いる語とされている。

この「ゆかし」という語について、本稿では『枕冊子』について、その用語例をすべて日本古典全書により抽出し、語義および作者が意識した好奇心などを検討する。

さて、『枕冊子』の「ゆかし」を知る上で、特に注目すべき一章段「とくゆかしきもの」がある。先ずこの章段を吟味し、逐次順序に従って検討を加えていくことにする。

では、「とくゆかしきもの」の章段を示すと、

(1)とくゆかしきもの　巻染・むら濃・くくりものなど染めたる。人の、子生みたるに、男女、とく聞かまほし。よき人さらなり、えせ者、下衆の際だになほゆかし。除目のつとめて。かならず知る人のさるべきなきをりもなほ聞かまほし（一五四段）

この章段の冒頭部に「とくゆかしきもの」と「形容詞の連体形」プラス「もの」という形で用いられ、この場合「早く見たいもの」「早く聞きたいもの」「早く知りたいもの」と広義に受け取れる。作者が好奇心を覚えた物の中でも、特に気持ちの急く事象を具体的に列挙している。それは、先ず、染め上がりの出来具合を期待し、「早く見たい」という女性らしい意識を挙げ、次に、生まれた赤ん坊の性別が男性か女性か、身分のよき人・えせ者・下衆など区別なく、「早く知りたい」という人間共通の心情を挙げ、続いて、除目を記し、これも興味のある関心事の一つであり、「早く聞いて（知りたい）」と思う心情を示している。いずれも女性特有のせっかちな心理状態を捉えている。

次の用語例から順次「ゆかし」を検討していく。

(2)思はむ子を法師になしたらむこそ心苦しけれ。ただ木の端などのやうに思ひたるこそいといとほしけれ。精進物のいとあし

Osaka Shoin Women's University Repository

きをうち食ひ、寝ぬるをも。若きはものもゆかしからむ。女などのあるところをも、などか忌みたるやうにさしのぞかずもあらむ。それをもやすからずいふ。（五段）

本章段では、「ゆかしから」と「形容詞の未然形」で用いられている。若い法師は「物も見たいし」「聞きたいし」「知りたい」とも思うだろう。女などのいるところも、どうして、忌み嫌ったように覗かずにいられようか、それをも世の中の人は非難すると、当世の法師の窮屈な生活の一端を示しながら、人間としての若法師の素直な好奇心を『枕冊子』の原作者は理解している。

(3)年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし

といふことを、「君をし見れば」と書きなしたる、御覧じくらべて宮「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」とおほせらるるついでに、（二一段）

本章段では、「ゆかしかり」と「形容詞の連用形」で用いられている。「年ふれば齢は老いぬ」の歌を「君をし見れば」と書きかえた時、才豊かな中宮が発した言葉の中に「（あなたの機知）を知りたかったのだよ」と、さも満足した心情で述べ、相手の機知の鋭利さを称賛している。

(4)すさまじきもの……人の國よりおこせたる文の、ものなき。京のをもさこそ思ふらめ、されど、それはゆかしきことどもをも書き集め、世にあることなどをも聞けば、いとよし。（二三段）

「ゆかしき」と「形容詞の連体形」で用いられている。田舎からきた手紙に、産物がついていないのは面白くない。また、京からきた手紙も、田舎ではそう思うだろう。しかし、京からの手紙には、田舎の人が「知りたい」と思っていることなどを書き集めてあり、世の中にあることなどを、知ることができるので、手紙だけでよい。とあり、当時の世相の一端が窺い知れる。即ち、栄華を極めていた京文化を田舎の人達が「知りたい」と思う強い好奇心が顕わに示されている。

(5)にくきもの……ものうらやみし、身の上歎き、人の上いひ、つゆ塵のこともゆかしがり聞かまほしうして、いひ知らせぬをば怨じ、そしり、またわづかに聞き得たることをば、われもとより知りたることのやうにこと人にも語りしらぶるも、いとにくし。（二六段）

「にくきもの」の章段に、「動詞の連用形」で用いられている。他人をうらやみ、自分の身の上を嘆き、他人の身の上を評判にし、ほんのちょっとしたことでも「知りたがり」聞きたがったりして、言って知らせないのを怨み、そしり、またわずかに聞き得た事を、自分がもとから知っていることのように、他の人に調子づいて語るのもにくらしいとある。人間世界に生活している限り生じる不快感情の描写である。些細なことでも「知りたがる」好奇心は女性特有の心情であろう。したがって、女性の作者が捉えた観察眼で記されている。

(6)池は　かつまたの池。……御前の池、また

なにの心にてつけけるならむと、ゆかし。鏡の池。（三六段）

「池は」の章段に、「ゆかし」と「形容詞の終止形」で用いられている。

Osaka Shoin Women's University Repository

それは興味のあるおよそ十の池の名が挙げられている中で、「御前の池」はどういう訳でこの名がつけられたのだろうか。その訳が「知りたい」と、一つの池の名の由来をも「知りたい」とする作者の精緻な知識欲が見られる。

(7)職の御曹司におはしますころ……

いみじうくちをし、この山のはてを知らでやみなむことと、まめやかに思ふ。こと人も「げにゆかしかりつるものを」などいふを、御前にもおほせらるるに、おなじくはいひあてて御覧ぜさせばやと思ひつるに、かひなければ、御物の具どもはこび、いみじうさわがしきにあはせて（八三段）

「職の御曹司におはしますころ」の章段の「雪山」の条に、「ゆかしかり」と「形容詞の連用形」で用いられている。いつまで雪の山がもつか、見届けたかったが、急に中宮様が宮中にお帰りになることになり、この雪の山のおしまいを見届けられないのが残念である。他の女房達も「（その雪山が）本当にどうなるか見届けたかったのに」というと、中宮様も、またそのようにおっしゃる。このように雪山を中心に、中宮様とその周囲の女性達が描かれている。雪山がどうなるか自分自身の眼で確認したいという好奇心である。したがって、ここは女房達の会話文中に「見届けたい」という語義で使われている。

(8)清「なにするぞ」と問へば、車副「手つがひにて、眞弓射るなり。しばし御覧じておはしませ」とて、車とどめたり。「左近の中将、みなつきたまふ」といへど、さる人も見えず。六位など、立ちさまよへば、清「ゆかしからぬことぞ。早く過ぎよ」といひて、行きもて行く。道も、祭のころ思ひ出でられてをかし。（九五段）

「五月の御精進のほど」の章段に、「ゆかしからぬ」と「形容詞の未然形」プラス「打ち消しの助動詞の連体形」で会話の発語に用いられている。清少納言の一行が時鳥の声を聞きに賀茂の奥に出立する。その途中のことである。車副の男が「競射で、弓を射るのだそうです。しばらく御覧になっていらっしゃいませ」といって、車を止めた。「左近の中将方が、みな着座なさいます」というけれど、それらしい人も見えない。六位の人などが、あちこちしているだけなので、「見たくもないことよ。早く行きなさいよ」といって、ずんずん行く途中も、賀茂の祭のころが想い出されておもしろい。という時鳥を賀茂神社の奥へ探訪に出向く途中、競射の場面に偶然でくわす、その時、清女が発した言葉「（そんなもの）見たくもないわ」と強い拒否的態度で視点を逸らしている。視点の対象となったもの、即ち競射は女性としての清女には興味を惹起するものではなかった。それより心は時鳥に向けられていたのである。

(9)まだこなたにて、御髪などまゐるほど、宮「淑景舎は見たてまつりたりや」と問はせたまへば、清「まだ、いかでか。御車よせの日、ただ御うしろばかりをなむ、はつかに」ときこゆれば、宮「その柱と屏風とのもとによりて、わがうしろよりみそかに見よ。いとをかしげなる君ぞ」とのたまはするに、うれしくゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。（一〇〇段）

Osaka Shoin Women's University Repository

「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどのことなど」の章段に、「ゆかしさ」と「名詞形」で用いられている。中宮様がこちらで御髪を整えなさっている時、清女に「淑景舎を拝見したことがあるか」とお尋ねになるので、「まだでございます。どうして、おみかけ出来る時がございましょう。御車よせの日、ただしろ姿だけをちょっと」と申し上げると、「その柱と屏風のそばによって、私の後から、ひそかに見なさい。大変美しいお方ですよ」とおっしゃるので、清女は嬉しく、「拝見したい」気持ちにかられて、いつになったらお出になるのだろうと待ち遠しく思う、という叙述である。宮中の今一番の関心事は淑景舎原子様が御姉、定子中宮のもとにおみえになることである。美しさの点では、御姉定子中宮と双璧をなすと知られている淑景舎原子様を早く「拝見したい」のである。特に美意識の強い清女の好奇心の一端が窺い知れる。

(10)紅梅の固紋、浮紋の御衣ども、紅のうちたる、御衣三重が上にただ引き重ねてたてまつりたる。宮「紅梅には、濃き衣こそをかしけれ、え着ぬこそくちをしけれ。いまは紅梅のは着でもありぬべしかし。されど、萠黄などのにくければ、紅にあはぬか」などのたまはすれど、ただいとぞめでたく見えさせたまふ。たてまつる御衣の色ことに、やがて御かたちのにほひあはせたまふぞ、なほことよき人もかうやはおはしますらむとぞゆかしき。

(一〇〇段)

同じく「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどのことなど」の章段の前用例文の連繋節である。ここでは「ゆかしき」と「形容詞の連体形」で用いられている。先ず、定子中宮の服飾と容貌とを讃美している。中宮様は紅梅の固紋、浮紋の御召物などを、紅の打衣と、下着三枚を重ねた上に、ただひき重ねてお召しになっていらっしゃる。中宮様が「紅梅には、紅の濃い衣がよいものですね。今はもう着られないのが残念。今の季節では、紅梅の衣は当然着ないでいいでしょう。しかし、萠黄などがきらいなのでね。紅色には合わない気がしてね」などとおっしゃるが、ただまことにすばらしくお見えになっていらっしゃる。お召しになっていらっしゃる御衣裳の色が格別で、それが、そのまま御容貌の美しさに映えているのはすばらしいが、もう一方(淑景舎様)も、このようでいらっしゃるのだろうか。早く「拝見したい」と姉宮、定子中宮の衣装の美が清女の目によって詳細に捉えられ、それが御容貌に照り映えこの上なく美しいと、女性特有の鋭い観察眼をもって巧みに叙述されている。では、妹君淑景舎原子様はどのように美しいのであろうか。「(早く)拝見したい」と、美的感覚に秀でた清女の好奇心を駆り立たせている。

(11)衣の裾、裳などは、御簾の外にみなおし出だされたれば、殿、端のかたより御覧じ出だして、「あれは誰そや。彼の御簾の間より見ゆるは」ととがめさせたまふに宮「少納言がものゆかしがりて侍るならむ」と申させたまへば、(一〇〇段)

この例文も同じく「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどのことなど」の章段の一節である。ここでは、接頭語「もの」プラス「形容詞の語幹「ゆかし」プラス接尾語「がる」から組成された「ものゆかしがる」という形態で用いられ、なんとなくしきりに心がひかれる意で

Osaka Shoin Women's University Repository

ある。では本断章の叙述描写を見てみると、着物の裾や裳などは、御簾の外にみなおし出されていたので、殿は、端の方からお見つけ出しあそばされて、「あれは誰かね。あの、御簾の間から見えるのは」とおとがめなさると、中宮様が「少納言が（こちらを）『見たがっている』のでございましょう」と申し上げなさる。という場面で、中宮様が関白道隆様に申し上げた言葉の中に「ものゆかしがり」とあり、「見たがっている」と意味付けるのが最も適訳である。作者清少納言は、意識の対象を高貴な方々に求め、その様子を直接自分の目でじっと観察したいという積極的な心理を自ら記しているのである。本断章中には「御覧じ」「見ゆる」「ものゆかしがり」と視覚用語の連鎖で視覚的構図を作り上げている。因に、前用語例(9)(10)は、本章段の連繋文であるが、(9)の「ゆかしさ」は美しい淑景舎原子様を早く「拝見したい」と視覚的知覚を示し、(10)の「ゆかしき」は、御姉定子中宮がこの上なく美しい様子を讃美し、そのように御妹君、淑景舎様もきっと美しいだろう早く「拝見したい」。この心情をやはり、視覚的に知覚を求めている。結局、本章段には「ゆかし」の感覚が三例見られたが、三例共、気品に満ち溢れた高貴な御方に関心をよせ、積極的に早く「拝見したい」気持ちが、次々に強く働くのである。いずれも清女の視覚的鋭さが窺える。

(12)また夜などはこもらで、人人しき人の、青鈍の指貫の綿入りたる白き衣どもあまた着て、子どもなめりと見ゆる若き男のをかしげなる、装束きたる童などして、侍などやうの者どもあまたかしこまりゐねうしたるもをかし。かりそめに屏風ばかりを立てて、額などすこしつくめり。かほ知らぬはたれならむとゆかし。知りたるはさなめりと見るもをかし。（一一六段）

「正月に寺にこもりたるは」の章段に、「ゆかし」と「形容詞の終止形」で用いられている。夜などは籠らないで、かなりの身分らしい人が、青鈍の指貫の綿の入っているのや、白い衣どもをたくさん着て、子供であるらしいと見える若い男の美しいのや、着飾った少女などをつれて、侍などのような者どもがたくさんかしこまって、座して祈念しているのも面白い。ほんのかりそめに屏風だけを立てて、額づきなど少しするようだ。顔を見知らないのは誰であろうかと「知りたい」。知っているのは、あの人だと思って見るのも面白い。と描写している。清女は自分自身の目で、いろいろな人の様子を精細に観察し、さも楽しそうに捉えている。その中で、顔を知らない人は、一体誰であるか好奇心がわき「知りたい」と思うのである。したがって、ここの「ゆかし」は「知りたい」と意味付けるのが適当である。

(13)いみじう心づきなきもの　祭・禊などすべて男のもの見るに、ただ一人乗りて見るこそあれ。いかなる心にかあらむ。やむごとなからずとも、若き男などのゆかしがるをもひき乗せよかし。すき影にただ一人ただよひて心ひとつにまぼりゐたらむよ。いかばかり心せばくけにくきならむとぞおぼゆる。（一一七段）

「いみじう心づきなきもの」の章段に、「ゆかしがる」と「動詞の連体形」で用いられている。たいそう気に入らないものは、祭や禊など

Osaka Shoin Women's University Repository

すべて、男が、何か見物する時に、ただ一人車に乗って見ることだ。いったいどんな気持ちなのであろう。よい身分でなくても、若い男などで「見たがっている」者でも乗せてやればいい。簾の透影にたった一人ちらちらして、自分だけで見つめていたりするなんて。どんなに心がせまく、こにくらしい人なんだろうと思われる。という心理描写の中に、よい身分でなくても、若い男などの「見たがっている」者でも乗せてやればよいのにと、いかにも女性らしい情愛のこもった心情をみせている。ここの「ゆかし」は祭や禊を「見たがっている」という意である。

(14)藤三位「さは、こは誰がしわざにか。すきずきしき心ある上達部・僧綱などはたれかはある。それにや、かれにや」など、おぼめきゆかしがり申したまふに、うへの、「このわたりに見えし色紙にこそいとよく似たれ」とうちほほ笑ませたまひて、いま一つ御厨子のもとなりけるを取りて、さしたまはせたれば、

（一三三段）

「円融院の御はての年」の章段に、「ゆかしがり」と「動詞の連用形」で用いられている。この語の周辺の叙述をかいつまんで説明すると、藤三位は、その手紙を二つながら持って、中宮様の御前にいそぎまるるのである。そして、「かかることなむ侍りし」と藤三位は、天皇もいらっしゃる御前でお話し申し上げると、中宮様は、知らぬ風にご覧になり、「藤大納言の手のさまにはあらざめり。法師のにこそあめれ。むかしの鬼のしわざとこそおぼゆれ」などと、大変真面目におっしゃるので、藤三位は、「では、これは誰のしわざでしょうか。風流心のある上達部・僧綱などには誰がいますか。この人か、あの人だろうか」などと、不審がり、「知りたがり」申されるので、天皇が「このあたりに見えた色紙（の筆跡）に、大変よく似ている」とほほえまれて、いま一つ御厨子のそばにあったのを取って、お示しになる。という描写中、「おぼめきゆかし」という心理をみせている。したがって、懐疑心を解明しようとする意図が明瞭に表われている。

(15)前栽に萱草といふ草をませ結ひていとおほく植ゑたりける。花のきはやかにふさなりて咲きたる、むべむべしきところの前栽には、いとよし。時づかさなどは、ただかたはらにて、鼓の音も例のには似ずぞ聞ゆるをゆかしがりて、若き人人二十人ばかりそなたに行きて、階より高き屋にのぼりたるを、これより見上ぐれば、あるかぎり薄鈍の裳・唐衣、おなじ色の單衣襲、紅の袴どもを着てのぼりたるは、いと天人などこそえいふまじけれど、空よりおりたるにやとぞ見ゆる。（一五六段）

「故殿の御服のころ」の章段に、「ゆかしがり」と「動詞の連用形」で用いられ「見たがる」「聞きたがる」の意である。本段の情況を説明すると、故殿の御服のころ、六月のつごもりの日、大祓ということで、中宮は宮中からおでましになるはずであったが、職の御曹司は方角が悪いので、太政官庁の朝所にお移りになった。その翌朝、あたりの様子が珍しいので、女房達は庭に下りて遊ぶ。

庭には萱草という草を、ませ垣を結って、たいそう多く植えてあった。花が際立って房になって咲いているのは、格式ばった所の庭

Osaka Shoin Women's University Repository

には、たいそうよい。漏刻の司などは、ただすぐそばで、（時刻を告げる）鼓の音もいつもとちがって聞えるのを「（そばで聞きたがり）見たがって」、若い女房達が二十人ばかりそちらに行って、階段から高い鐘楼にのぼっているのを、こちらから見上げると、皆薄鈍の裳・唐衣・同じ色の単衣襲・紅の袴を着てのぼっているのは、とても天人などとはいえそうにない。空から降りたのであろうかと見られる。という叙述場面には動きが看取出来る。その楽しそうな雰囲気を醸し出す描写中、「聞ゆるをゆかしがりて……そなたに行きて」と、「聴覚」＋「視覚」＋「行動」という精妙な技法をとっているのは見遁し難い。即ち、鼓の音に誘われて行って、そして「（そばで聞き）見たい」といういかにも清女らしい感覚で捉えている。作者清女はこの一場面から考察しても、秀でた感覚の持ち主であるといえよう。結局、本用語例文中の「ゆかし」は視覚を表わし、「（聞きたがり）見たがって」と解するのが適当である。

(16)しばしありて、前駆高う追ふ声すれば、女房「殿まゐらせたまふなり」とて、散りたるもの取りやりなどするに、いかでおりなむと思へど、さらにえふとも身じろかねば、いますこし奥に引き入りて、さすがにゆかしきなめり、御几帳のほころびよりはつかに見入れたり。（一七九段）

「宮にはじめてまゐりたるころ」の章段に、「ゆかしき」と「形容詞の連体形」で用いられている。この「ゆかしき」の好奇心を検討してみる。本章段は、清少納言がはじめて中宮定子のもとに宮仕えした時の印象を、回想的に記録したものである。中宮様にはじめて接した時の心情から雪の美というように展開していく。そして、前駆ばらいの声がすると、女房達が「関白殿がいらっしゃったようだ」と言って、ちらかしてあったものをとりかたづけなどするので、どうかして局へ引っこんでしまおうと思うが、全然、どうにも身動きがとれないので、いま少し奥にはいり込んだが、やはり「見たい」のであろう。御几帳のほころびから少し中をじっと見ていた。と新参の清女らしい心境を自らやおら記している。弱気の内にも、「（お姿を）見たい」という好奇心が強く湧くのである。そして視点は関白殿に向けられる。

(17)心にくきもの……夜いたくふけて、御前にも大殿籠り、人人みな寝ぬる後、外のかたに殿上人などのものなどいふに、奥に碁石の笥に入るる音あまた度聞ゆる、いと心にくし。火箸をしのびやかに突い立つるも、まだ起きたりけりと聞くも、いとをかし。なほ寝ねぬ人は、心にくし。人の臥したるに、ものへだてて聞くに、夜なかばかりなどうちおどろきて聞けば、起きたるなりと聞えて、いふことは聞えず、男もしのびやかにうち笑ひたるこそなにごとならむとゆかしけれ。（一九二段）

「心にくきもの」の章段に、「形容詞の己然形」で用いられている。この「ゆかしけれ」の対象および語義を検討するに当たり、先ず本断章の叙述描写を見てみたい。夜が大層更けて、中宮もおやすみになり、女房達も皆寝てしまった後、外の方で、殿上人などが何か話をしかける、その奥で碁石を笥に入れる音が何度も聞こえる。実に心

Osaka Shoin Women's University Repository

がひかれる。火箸をそっと突っ立てるのも、まだ起きていたのだったなと聞く。まことによい。なお寝ない人は、心ひかれる。人が寝ている時、夜なかなどに、ふと目をさまして、ものごしに聞くと、起きているのだなあと思われて、いうことは聞こえず、男も忍びやかに一寸笑っている様子こそ、何を話しているのだろう。「聞きたいものだ」。視界が暗くなると、聴覚の世界に移る。それは、夜更けたしじまの中で耳を傾けると、話し声や碁石を笥に入れる音等が、微かにそして明瞭に伝わってくる。なんとも清女らしい聴覚の鋭敏さを感受することが出来る。また、この断章中、「音あまた度聞ゆる」・「起きたりけりと聞く」・「ものへだてて聞けば」・「起きたるななりと聞えて」・「いふことは聞えず（話しの内容は聞こえなくても声は聞こえるのであろう）」・「なにごとならむとゆかしけれ」と聴覚用語が連鎖していることに注目したい。このように見てくると、「聞く」という聴覚用語の連鎖の最後を飾って、好奇心を示す語「ゆかしけれ」と結んでいるのは、私見によると、これも聴覚的意義を有する語であると判断したい。したがって、ここの「ゆかしけれ」は「聞きたいものだ」と解すると、より文脈に適合すると思う。因に、能因本『枕冊子』のこの該当部分には「なにごとならむとをかしけれ」と本文に少異を見せているが、勘案するに、ここはやはり、聴覚用語の連鎖の締めくくりとして、聴覚的好奇心を示す「ゆかしけれ」の本文の方が、より原作者の意図に添うものであると考えたい。

(18)うれしきもの　まだ見ぬ物語の一を見て、いみじうゆかしとのみ思ふが、のこり見出でたる。さて、心おとりするやうもありかし。　（二六〇段）

「うれしきもの」の冒頭部に、「ゆかし」と「形容詞の終止形」で用いられている。清女が「うれし」と感じた第一のことは、まだ読んだことのない物語の第一巻を読んで、その続きが「読みたい」とばかり思っているのが、その続きを見つけ出した時はうれしい。とあり、本の第一巻を読んで、その続きが読みたくて仕方がないという、読書欲旺盛な清女の心情が感受出来る。したがって、ここの「ゆかし」の語義は「（本を早く）読みたい」という、視覚系の好奇心を示している。

(19)御文は大納言殿取りて殿にたてまつらせたまへば、引き解きて、
関白殿「ゆかしき御文かな。ゆるされ侍らば、あけて見侍らむ」
とはのたまはすれど、あやふしと思いためり。関白殿「かたじけなくもあり」とてたてまつらせたまふを、取らせたまひても、ひろげさせたまふやうにもあらずもてなさせたまふ御用意ありがたき。　（二六二段）

「関白殿、二月二十一日に法興院の積善寺といふ御堂にて」から始まる長文の一断章に、「ゆかしき」と会話文中に「形容詞の連体形」で用いられている。この語が用いられている場面は、宮中から式部の丞なにがしが参上する。そして、御手紙は大納言殿が受け取って、関白殿にさしあげなさると、殿は、包みをあけて、「『読みたい』お手紙だな。お許しがございましたら、あけて見とうございます」とはおっしゃるが、また、ひやひやしていらっしゃるようです。関白殿

Osaka Shoin Women's University Repository

「やはりおそれ多いことです」とおっしゃって、中宮様にお手紙をさしあげなさるが、中宮様はそれをお受け取りになっても、おひろげになるご様子もない御心づかいはたぐいないものだ。と、関白殿の言葉の発語に「ゆかしき御文かな」と感情をより一層強めておっしゃる。即ち、「読みたいお手紙だな」と訳し、視覚系好奇心を示す。

⑳まいて、うちほほゑむところはいとゆかしけれど、遠うゐたるは、黒き文字などばかりぞ、さなめりとおぼゆるかし。（二七七段）

「つねに文おこする人の」の章段に、「ゆかしけれ」と「形容詞の已然形」で用いられている。後朝の文を扱ったこの章段の「ゆかしけれ」は、微笑しながら読んでいるあたりの文面をとても「読みたい気もするけれど」、遠くに座っている時は、黒い文字などだけが、それらしいなとおもわれることだ。と、文字を扱っている描写である故、「読みたい」心境を表わしているものと思われる。したがって、本章段においても、視覚系好奇心を示す心情である。

次に最後の用語例の検討に移る。

㉑よき人のおはしますありさまなどのいとゆかしきこそ、けしからぬ心にや。（二八六段）

「宮仕へする人々の出で集まりて」の章段の末尾の一文に、「ゆかしき」と「形容詞の連体形」で用いられている。この一文は、清少納言が宮仕え中のことを記述したものであれば、貴人の生活は自ら体験してわかっているはずである。したがって、宮仕えを退いた後、貴人の生活が気になって、人伝てにでもその消息を聞いて「知りたい」という、宮仕え時代を懐旧しながらの心理であろうと思われる。このように考えて、ここの「ゆかし」は「知りたい」と意味付けるのが最も適切であり、貴人の生活を直接体験出来なくなった今、間接的に聞いて「知りたい」という心情を表わし、聴覚系好奇心を示している。

以上、個々の用語例をつぶさに検討吟味してきたが、ここで全用語例を通覧しまとめをする。

『枕冊子』における「ゆかし」の意味は、先に考察してきたが、明確に判定出来るものもあったが、どの感覚で捉えた好奇心であるか、曖昧で境界線を簡単に引き難いものもあったが、文脈上その感覚の要素が濃厚に感受出来るものによって意味付けを試みた。それらの意味は「見たい」・「聞きたい」・「知りたい」・「読みたい」の四種と、「見たい・聞きたい・知りたい」と三種の意味を複合的に使ってあるものに大別出来る。この内、「知りたい」と意味付けしたものに多少問題がある。即ち、「知りたい」という知覚には、あらゆる感覚が包含されているため、さらに詳しくその該当部分のみ、どの感覚が強く働いているかを見てみたい。

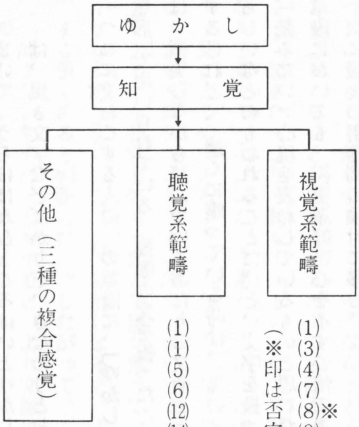
先ず用語例　(1)赤ん坊が男か女か（聞いて）「知りたい」、(3)機知を（見て）「知りたかった」、(4)都のことを手紙を（読んで）「知りたい」、(5)ほんのちょっとしたことでも（聞いて）「知りたがる」、(6)御前池と名がつけられた理由を（聞いて）「知りたい」、(12)誰であるか（聞いて）「知りたい」、(14)誰のしわざか（聞いて）「知りたがる」、㉑貴人の生活を（聞いて）「知りたい」。この八例が「知りたい」と

Osaka Shoin Women's University Repository

意味付けた事例である。このように「知りたい」という知覚には八例中の六例に聴覚が伴っており、二例に視覚が伴ってそれぞれの関心事を捉えることが出来る。

では、ここで改めて先に検討してきた「ゆかし」の全用語例を次のように整理しておく。

（但し、用語例(1)は三事例に基づく）



このように三系列の感覚に大別出来る。したがって、『枕冊子』の「ゆかし」は、視覚系範疇に属する好奇心が最も数多く、次いで聴覚系範疇に属する好奇心が多く、嗅覚・味覚などの感覚は見当たらない。そして、それらの対象は種々の事象に対して好奇心を求めており、又、「ゆかし」の意識を起こした人達は、中宮・女房・清少納言の女性が総用例数の大部分を占め、その中でも、作者清少納言の好奇心が最も多く見られる。結局、清少納言という女性は、好奇心の旺盛な性格であるといえる。